

注目のキーワード「フードテック」

フードテックとは、フード(Food)とテクノロジー(Technology)を組み合わせた言葉で、生産から加工、流通、消費等へとつながる食分野の新しい技術及びその技術を活用したビジネスモデルのことです。フードテックへの世界の投資額は過去10年間で約10倍に増加しており、既存の産業とテクノロジーを結び付けるX-Techの中でも注目が高まっている分野です。

具体的な領域として代表的なものは代替食です。植物由来の原料を使用し肉の食感に近づけた「代替肉」は、大豆ミート等として食品スーパーでも見かけるようになりました。細胞から人工的に食肉を作る「培養肉」の開発も進んでいます。生産・加工・流通現場では、ロボットによる省人化・効率化や、フードロス削減に向けたAIによる需要予測があります。より身近なところでは、配膳ロボットやモバイルオーダー、スマート調理家電もフードテックです。このように、食分野のあらゆる面にテクノロジーを活用したイノベーションの可能性が秘められています。

では、なぜフードテックが注目されているのでしょうか。一つは食料の安定供給です。農林水産省によると、世界的な人口増加等により食料需要は2050年に2010年比で1.7倍に増大すると想定されています。特に、食肉や乳製品に含まれるタンパク質の需給バランスが崩れることが懸念されており、持続可能な食料供給の必要性が高まっています。二つ目は環境問題です。食料需要が増える一方、飼料栽培や家畜のゲップ由来のメタンガス排出のように食料生産は環境負荷がかかるため、低減させる技術開発や生産効率の向上が求められています。三つ目は労働力不足です。特に日本では、少子高齢化に伴い農林水産業や配送、飲食店における人手不足が深刻化しており、フードテックにその補完が期待されています。その他、食物アレルギーやハラールフード(イスラム教で食べることが許された食事)、健康増進等多様なニーズへの対応や、食の安全確保、ウクライナ侵略を契機とした食料安全保障への懸念等が背景にあります。

日本でもフードテックへの関心は高まっていますが、他国と比較して投資額は小さくなく、まだ発展途上です。食分野がイノベーションによりどのように変わっていくか、今後の国内外の動きに注目です。

(総合調査部 課長補佐 鄭 美沙)

Side Mirror

7月に25bpの利上げをしたFRB。年内のFOMCは9月、11月、12月の3回。FOMC内の意見も割れていると言われている中、8月恒例のジャクソンホール会議でのパウエル議長の発言に注目が集まった。事前に中立金利上昇?(自然利子率+期待物価上昇率)の話もあったがそれに対する明確な発言はなく、今後の金融政策はデータ次第という基本これまでと同じ内容の発言だった。

俄然注目されるようになった中立金利。現在2.0%~2.5%と言われているが、この水準を大幅に上回る利上げにもかかわらず経済が成長を続けていることもあり中立金利は考えられているレベルよりも高いのではないかという議論がみられるようになっていた。もしそうであればFFレートの天井は高くなるし、そもそも長期金利自体が上昇することも想定する必要があるグローバル金融危機以降の世界が大きく変わるということにもなる。

グローバル金融危機以降のゼロ金利+QEからの正常化の動きの中でFRBは2015年12月には利上げに転じ2018年12月にはFFレートを2.5%まで引き上げたが、そこが限界だったことを考えると、確かに足下の経済状況をみれば中立金利はもっと高いのではないかという議論が出るのも当然かもしれない。

ただ“今の経済”は利上げの効果もあり経済が減速気味だったところにコロナショックによる急激な落ち込み…からの未曾有の財政支出もあって急回復したものの、製造業とサービス業、労働集約型産業とデジタル産業といった業種、業務プロセスの違いによる回復の差も大きい。つまりこれまで経験してきた景気循環とは違う形で推移していると言えるのではないか。そうした上下動のなかで構造変化が起き短期間で中立金利が上昇した可能性はあるが、単に“異形の落ち込みと回復”の混乱が続いているだけかもしれない。中立金利の議論も大切だがこの循環で何が起きてこうなっているのかももう少し詳細に知りたいと思う。

(佐久間 啓)